第６章　預言者における祈り③

エレミヤII

エレミヤは、神とそのご性質をよく理解していましたが、他の偉大な祈りの人々と同様、時に非常な戸惑いを見せています。彼は、神から与えられた識別の賜物(I コリント 2:13-14 を参照)によって永遠の教えと実在とをかいま見る一方、絶えず御霊との戦いの中にある(ガラテヤ 5:17 参照)肉体を依然として身にまとっていました。これはエレミヤも同じだったのです。

> 主よ。私があなたと論じても、あなたのほうが正しいのです。それでも、さばきについて、一つのことを私はあなたにお聞きしたいのです。なぜ、悪者の道は栄え、裏切りを働く者が、みな安らかなのですか。あなたは彼らを植え、彼らは根を張り、伸びて、実を結びました。あなたは、彼らの口には近いのですが、彼らの思いからは遠く離れておられます。主よ。あなたは私を知り、私を見ておられ、あなたへの私の心をためされます。…… いつまで、この地は喪に服し、すべての畑の青草は枯れているのでしょうか。そこに住む者たちの悪のために、家畜も鳥も取り去られています。人々は、「彼は私たちの最期を見ない」と言っているのです。(エレミヤ書 12:1-4)

エレミヤは主が裁きにおいて正しいことを疑ってはいませんでしたが、その生まれつきの物の見方のゆえに、一定の問題をめぐっては神に考えをぶつけるところとなりました。邪悪な人々に対する神の扱いは、自分に対するお取り扱いよりもはるかに恵みと憐れみに満ちたものに思えたのです。しかし、葛藤はしていたものの、このことは、正当化することが全くできないように思われるとともに、神の行いをそのご性質に照らし合わせて調整していただける可能性も全く無いように思われました。詩篇 73 篇の記者は、同様の観察を行なっています(3-17

節を参照)。

このような面倒な思いは、どのように扱えばいいのでしょうか。エレミヤは祈りました。詩篇記者も、神の聖所に入って行きました(73:17 を参照)。両者とも、目の前の問題に真正面から向き合いました。残念なことに、多くの人々は疑いに蓋をし、それゆえ、かつては確固たるものであった信仰を知らず知らずのうちに破壊していく、様々な影響力の餌食となっていきます。疑いを抑圧することは、開かれた心と率直さを窒息させ、真理に対する無関心を生み出すことです。疑いはただ、大胆に向き合う時にのみ、克服されるのです。

信仰者なら誰しも、厄介な数々の疑いの思いに対する答えは、人間の最も優れた知性の及びもつかないところにあるということを早い時期に学んでおかなければなりません。やがては死すべき者の達し得る最善の理解など、神の方法と知恵の高み深みに至ることはないのです(I コリント 1:21 を参照)。こういった疑いの思いは、私たちを神のもとから追い払うのでなく、神のもとへと向かわせるものでなければなりません。祈りは、無限の知恵を開く鍵なのです。どんどんと増し加わって私たちの思いを曇らせてしまう疑いは、この方法によってのみゼロに減らすことができるのです。「知恵と啓示の御霊」(エベソ 1:17)に私たちの理解の目を開いていただくのです。

真実ながらも人々の好まないメッセージを語る神の預言者たちは、欺かれた人々が偽りの預言者の後を追いかけるのを見て苦しむかもしれません。神の預言者たちと神の民とが対峙しなければならない偽りの預言者(マタイ 7:15、マルコ 13:22、黙 20:10 を参照)は、古来、いつの時代にも存在しました。偽預言者のメッセージが、苦難など来ない、ただ平和だけが来るのだというように、自分に対する神のメッセージとは正反対のものであった場合は、エレミヤもまた、彼らに対峙しなければなりませんでした。

> 私たちの咎が、私たちに不利な証言をしても、主よ、あなたの御名のために事をなしてください。私たちの背信ははなはだしく、私たちはあなたに罪を犯しました。イスラエルの望みである方、苦難の時の救い主よ。なぜあなたは、この国にいる在留異国人のように、また、一夜を過ごすため立ち寄った旅人のように、すげなくされるのですか。…主よ。… 私たちはあなたの御名をもって、呼ばれているのです。私たちを、置き去りにしないでください。主はさらに、私に仰せられた。「この民のために幸いを祈ってはならない。彼らが断食しても、わたしは彼らの叫びを聞かない。全焼のいけにえや、穀物のささげ物をささげても、わたしはそれを受け入れない。かえって、剣とききんと疫病で、彼らをことごとく絶ち滅ぼす。」私は言った。「ああ、神、主よ。預言者たちは、『あなたがたは剣を見ず、ききんもあなたがたに起こらない。かえって、わたしはこの所でまことの平安をあなたがたに与える」と人々に言っているではありませんか。」
>
> 主は私に仰せられた。「あの預言者たちは、わたしの名によって偽りを預言している。わたしは彼らを遣わしたこともなく、彼らに命じたこともなく、語ったこともない。彼らは、偽りの幻と、むなしい占いと、自分の心の偽りごとを、あなたがたに預言しているのだ。(エレミヤ書 14:7-9、11-14)

この悲しい状態への非難は、偽預言者を責めるものだけではありません。偽りに飢えた人々は、宗教的なことであれ、他の何かであれ、自分たちの好むことを語ってくれる預言者を見つけるものなのです。エレミヤの祈りは、私たちに二重の課題を突きつけるものとなっています。 **①神のために語っていると主張する人々は、自分の心の内を語る人々に影響されない真の預言者でなければなりません。 ②誤った人々の気まぐれな望みを自分の利益のために満たす人々については、神ご自身が目を留めて対応されます。**

偽預言者に耳を傾けることに加えて、人々は時として自分たちの聞きたいことへの答えや確証を得ようと、偽りの神々に助けを求めました。人類は、歴史を通じて、多くの異なる神々に祈りを捧げてきました。神の民でさえもしばしば、唯一のまことの神からの言葉がいただけないと思うときには、偽りの神々に走るものです。しかしエレミヤは、それらの偽りの神々に正確なレッテルを貼っています。**「むなしい神々」**というレッテルです。

> なぜ、あなたは、私たちを打って、いやされないのですか。私たちが平安を待ち望んでも、幸いはなく、いやしの時を待ち望んでも、なんと、恐怖しかありません。主よ。私たちは自分たちの悪と、先祖の咎とを知っています。ほんとうに私たちは、あなたに罪を犯しています。御名のために、私たちを退けないでください。あなたの栄光の御座をはずかしめないでください。あなたが私たちに立てられた契約を覚えて、それを破らないでください。異国のむなしい神々の中で、大雨を降らせる者がいるでしょうか。それとも、天が夕立を降らせるでしょうか。私たちの神、主よ。それは、あなたではありませんか。私たちはあなたを待ち望みます。あなたがこれらすべてをなさるからです。(エレミヤ書 14:19-20)

祈りの主要な目的は、願っている対象を得ることではありません。むしろ、神との関係、すなわち神のご性質と権威に沿った関係が、徐々に発展していくことにあります。したがって、祈りの中には失望をもって応答するものもありますが、神のみこころに対して、従順、服従、降伏などを響かせるものもあります。祈りは、「みこころがなりますように」という真摯な心の叫びを宣言する時に最高潮に達するのです。祈りの究極的な意図は、「御名のために」(14:21)のように、神に栄誉を帰することでなければなりません。「イエスのために」という祈りが心の底から捧げられるとき、何にも優ってそれを表現するものとなるのです。

質問

1　なぜエレミヤは神がなさることに非常な戸惑いを感じていましたか。
あなたも神がなさることに戸惑いを感じたことがありますか？そのとき、どうしましたか？

2　疑いに蓋をし、疑いを抑圧するとどんなことが起こりますか？疑いの思いに対してどうしたらよいですか？
あなたがエレミヤのように疑いを抱いているなら、どのように祈ったらよいと思いますか？

3　偽預言者が語るメッセージはどのようなものですか？なぜいつの時代でも人々は偽預言者のことばを求めたり、偽りの神々に走ったりするのですか？あなたは、自分が好まないことばでも、真実であるならそれを聞こうとしていますか？

4　祈りの主要な目的は何ですか？　あなたの祈りは、祈りの主要な目的にかなったものになっていますか？

5　今日読んだ箇所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？どんなことを実践したいと思いますか？

祈り

天の父なる神さま。私の戸惑いや疑いを正直にあなたの前にもっていきます。祈りの中で知恵が深められ、あなたとの関係が今よりもさらに豊かなものとなりますように。私に知恵と啓示の御霊を与えて下さい。